

明治の好古家 根岸武香コレクション資料 ー2

ー「上中条出土の武人埴輪と巫女埴輪」ー(改定版)

はじめに 明治時代に考古・古文書・古器物などの歴史資料に関心を寄せた「好古家」と呼ばれる人たちは、個人コレクションとして様々な資料を遺しています。東京国立博物館の収蔵品には、全国の好古家たちのコレクションが含まれています。彼らの活動した時期は、文明開化のもと生活習慣の刷新や新文化創造の高まりの一方、伝統的な書画文物古器物の放棄や海外流出は留まることを知りませんでした。この状況に憂慮し資料蒐集や、その研究、その図書の出版に取り組む人々もいました。

根岸武香は政治家でありながら人類学会に属し、考古界・集古会を主催し、自らも発掘・資料集・研究・出版を行った行動的な文化人でした。

今回の展示は、考古資料の蒐集品「古代瓦」に続き、市内の上中条地内から発見された埴輪のなかで根岸家に現在まで保存されてきた「人物埴輪」を取り上げます。



「根岸 武香」の肖像

上中条での発見 明治9年(1876)12月埼玉郡中條村(当時)から埴輪馬や人物埴輪が発見されたとの連絡が、地元の中村孫兵衛(後に大里郡長)から伝えられました。武香の古物収集を知る好古家仲間の中村には日常的な情報提供だったようです。武香は明けて1月に現地へ出向き、発見地と地主の江森定之丞(武香の記録では江森善兵衛)を訪ね、埴輪を譲り受けることになります。

埴輪の発見から武香の収集までの事情は残された記録によると、発見場所は上中条地内(現在)小字「日向島 1876 番地」とされますが、「沼窪」「雷電」ともあることから複数の古墳から発見したと思われます。中条古墳群の中では東方に位置していた「雷電塚古墳・鹿名祇東古墳・鹿名祇西古墳・団扇塚古墳・屯倉塚古墳」などが相当すると考えられます。後の土地改良時の発掘調査では前記の想定地から古墳跡は発見されず、出土地の再確認は今となっては困難のようです。

また、発見時の埴輪について「常光院住職の手記」によれば、人物埴輪12体、馬形1体と記録されています。一方、県への「掘出届」には人物埴輪8体・馬1体と、更に後に提出された「上申書」では人物埴輪4~5体・馬1体、皆破損とあります。武香が訪問時の様子を記した記録では「弥生のひなを並べたよう」と多数の人物埴輪を目にしています。数量等については人物埴輪がこの有様ですから、多数出土したはずの円筒埴輪については全く注意が向けられず、記録も伝来品も残されていないようです。



現在、古墳所在地は一帯の耕作地となり往時の古墳群の有様を想像することは難しくなっていますが、昭和54年(1979)に「鎧塚古墳」、昭和56年(1981)には「女塚1号~5号墳」が発掘され、「鎧塚古墳」と「女塚1号墳」は前方後円墳で他は円墳との墳形や規模が分かってきました。この古墳の墳丘は削平されていましたが周溝からは多数の円筒、朝顔形円筒埴輪と巫女・盾持武人などの人物埴輪、馬・鹿の動物埴輪や祭祀用の土器群が発見されました。中条古墳群は全長50m前後の小中規模の古墳群と想定され、多数の埴輪を樹立しており中には、「短甲武人」(左写真)のような優秀作を有しており、「日本の埴輪の代表作」の一つとなっています。

②の武人埴輪は、文献2では東松山大谷出土とされる。文献1の誤りと思われる。写②とは別物であろう。

⑧の人物埴輪は文献2では東松大谷からの出土される。また5の古写真によると鬘は左頬に付けられており、「耳」の可能性が高い。

⑨の人物埴輪は、右肩に掛るタスキが見られる。⑥と同姿勢をした巫女であろう。



①



②



③



④



⑤



⑦



⑧



⑥



⑨



写②



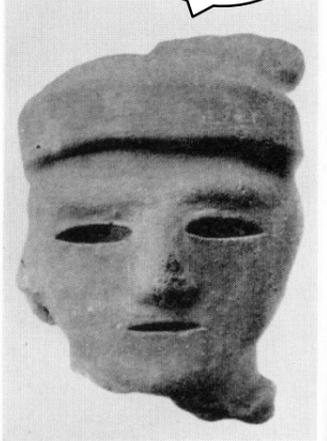
写③



写④



写⑤



写⑥

↑今回展示の主人公の一

↑今回展示の主人公の一人

印象的な「まなざし」を持つ上中条出土の人物埴輪たち



写①

- 【図・写真の出典】の文献 ※写①③⑤新井撮影
- 1 明治36(1903)年「根岸武香氏記念号」『東京人類学雑誌』第207号に掲載 図①②③⑤⑦⑧⑨大野延太郎(雲外)の筆画
 - 2 坪井正五郎・八木契三郎 明治31(1898)『日本考古学』に初出、図⑥本書には根岸所蔵の考古資料が多数掲載されている。同図は、清野謙次 昭和30(1955)『日本考古学・人類学史』下巻にも掲載される。清野の図には「江森善兵衛」名が見える。
 - 3 淡崖(神田孝平)明治20(1887)年「埴輪の事」『東京人類学雑誌』第2巻第11号 図④ 4 関西大学博物館 写②、④
 - 5 東京国立博物館 古写真 明治19(1886)年撮影 写⑩
 - 6 昭和49(1974)年『陶磁大系 第3巻 埴輪』平凡社 写⑦

明治時代初期に埼玉県熊谷市上中条から出土したとされる埴輪たちを紹介します。



↑今回展示の遅れてきた主人公の一人「少女のような『巫女』埴輪

⑫ 再会した上中条出土の「巫女」埴輪、顔たち、耳目口など細部の特徴がよく一致する。

⑪



顔の右側耳部分耳環と小玉が付される



馬形埴輪の切

⑥の人物埴輪は、頭部の形が④の人物埴輪と類似していることから元は同一個体の可能性がある。④の肩破片は初期の図や写真には見えないが、後に加わっている(関西大学所蔵 写④)。その背には「たすき」状の「おすい」が表現され、同一品の根拠となる。

埴輪蒐集の背景 上中条出土埴輪の入手は武香にとって記念すべき出来事だったらしく、蒐集の事情を記した手記が東京人類学雑誌に採録されていました。この記述と他の記録－A「常光院住職手記」(明治9年12月ころ作成)、B「掘出届」(明治9年12月12日作成)、C「上申書」(明治12年9月15日作成)から、埴輪の発見は明治9年12月2日として良く、この年に人目を惹く多くの埴輪の発見があったことは間違いないようです(文献-重田2014)。ただ、この発見は偶然とは云えないように思います。興味深いことに、個々の埴輪の説明を見ると例えば1.「武装男子」8.「農夫」埴輪は明治8年9月の発見とされています。このことは以前から上中条地内より埴輪の出土することが知られていたと思われれます。当時、租税の改正政策により共有地の課税や社祠・仏堂の合祀が推進されており、小社の祀られた古墳まで農地に転化する工事が盛んだったのです。工事に際し、埴輪が発見される機会も多く、武香等好古家が出土品を蒐集する環境に恵まれていたように思います。上中条出土埴輪の一部は根岸から、好古家の一人、神田孝平に頒たれ、神田から本山彦一を経て関西大学博物館収蔵となる埴輪(図番号②と④)、中村孫兵衛や根岸家から東京国立博物館へ寄贈された埴輪(図番号①と⑩)、そして根岸家や地元で保存された埴輪がありました。上中条出土の埴輪たちは分散して保存されましたが、現在も所蔵先の博物館などで見学することができます。

※上中条出土の埴輪群の再発見 今回の展示を観覧された方より、上中条出土埴輪の情報がもたらされました。早速「巫女」と推定される人物埴輪を実見したところ、顔の輪郭、杏仁形の目、瞼や耳の表現、粘土、焼き上がりなど正に上中条の人物埴輪の作風が共通しています。来歴に不詳の部分はありますが明治初年に他の上中条出土埴輪と同じころ発見され、地元家に保存されてきた埴輪であるとほぼ確定できると思います。今回の展示がきっかけとなって離れ離れ等なつた埴輪がおよそ150年ぶりに再会したともいえるでしょうか。根岸家及びもう一人の所有者のご理解を得て3体の人物埴輪をあらためて展示いたします。この機会に再度ご覧ください。

※埴輪名称は当初の呼称を参考としました。

- 1.「武装男子」(図①)、衝角付冑と横矧板鉾留式短甲を着装、半身像 腕 脚部を欠失
短甲着装の武人埴輪の代表例(国重要文化財) 現在-東京国立博物館所蔵品
- 2.「武装男子」頭部(図②)、衝角付冑を着装 現在-関西大学博物館所蔵品
- 3.「武装男子」頭部(図③)、庇付冑を着装、 現在-根岸家所蔵品
- 4.「男覲」頭部(図④)、男性の巫かななぎ 鉢巻 巻上髪櫛留、こうがいぼう 笄帽か 現在-関西大学所蔵品
- 5.「巫女」頭部(図⑤)、女性の巫、島田髻一部欠失 現在-根岸家所蔵品
- 6.「巫女」頭部(図⑥)、女性の巫 身体上半部 髻 襷 右腕を上げる 現在-所蔵先不明
- 7.「男子」頭部(図⑦) 鉢巻 (『陶磁大系 第3巻』に掲載) 現在-所蔵先不詳
- 8.「農夫」(図⑧) 頭頂に拳げ鬢(古写真では耳) 腰に鎌状の装飾 現在-根岸家所蔵品
- 9.「巫女」肩部(図⑨) 右肩部分に「おすい」と領巾の一部、首に勾玉の頸飾 現在-所蔵先不明
- 10.「人物埴輪破片」耳の部分 耳飾、小玉が付く 現在-所蔵先不明
- 11.「飾馬」鞍・六鈴付轡・輪鐙・馬鐸・三鈴杏葉付(国重要文化財) 現在-東京国立博物館所蔵品
- 12.「巫女」頭部(図⑫) 女性の巫女、島田髻 今回再確認・再発見 市内一個人所蔵品

【参考図書】

塩野 博 2004 『埼玉の古墳 {大里}』さきたま出版会

重田正夫 2014 「明治初期における武蔵の「好古家」根岸友山と武香(上)」『熊谷市史研究』第6号

【平成31年4月15日発行:熊谷市立江南文化財センター(熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係 編集:新井)】